

# “没有NP”についての考察

王欣・祝東平

摘要 “没有”可以否定名词是没有争议的，可是并不是所有的名词都能用“没有”否定。本文围绕石毓智的定量名词不能用数量词语自由称数是不能直接加“没”否定的原因展开讨论。分析了定量名词不能用“没有”否定的初始原因。即：“NP”能否进入“没有NP”这一语法格式，首先由客观事实决定，只有客观事实有否定的情况存在，人们才可以接受语言中的否定形式；其次，在人们认知世界中必须有其先设，就是说“NP”必须作为一个事物而存在，先设其肯定的情况，才可以有否定的形式出现。

关键词 没有 名词 否定 先设 客观事实

## 1. はじめに

“没有”という否定辞の品詞について、文法研究者の間に異なる見解が存在している。朱徳熙は『語法講義』(1982:71)において、動詞、形容詞や名詞の前に置かれる“没(有)”はすべて動詞であると述べている。これに対して呂叔湘等は、『現代漢八百語』(1984:382、383)において、動詞や形容詞の前に置かれる“没(有)”は副詞であり、名詞の前に置かれる“没”は動詞であると解釈している。両者は、“没(有)”の品詞については見解が異なるものの、“没(有)”は動詞や形容詞を否定できると同時に、名詞を否定することもできるという見解では一致している。しかし、中国語を母国語とする人であれば、すべての名詞が“没(有)”によって否定されるわけではないことに気付くことができる。例えば、“没有体态”、“没有神情”という表現は成立しないのである。

石毓智(2001:156)は、名詞が“没有”によって否定されるか否かについて、要旨を次のように説明している。

“可以把名词分为两类：(一)可用数量词语自由地称数的为非定量名词；(二)不能用数

量词语自由称数的相应地称之为定量名词。”後者の定量名詞が“一般不能直接加‘没’否定”，数量語句を用いて自由に数えられないことが、定量名詞が“没有”により否定されない理由であると整理している。

しかし、次の例文<1>を見ると、数量語句を用いて自由に数えられるか否かの区分は、NP（名詞節）が“没有”により否定されるか否かの決定的な理由とはならないことに気付かされる。

<1> A.\*“没有体态”、\*“没有神情”

B.“没有优美的体态”、“没有懊悔的神情”

ここに例示したAもBもNPの部分は数量語句を用いて自由に数えられないが、Aは語句として成り立たないのに対して、Bは語句として成り立つ。このようなNPが“没有”により否定されない理由の解釈についてはさらに検討の余地があると言える。

本稿の目的は、石毓智が論じた定量名詞を分析対象にしなが、NPが“没有”により否定されない理由を明らかにすることである。その検討のために、先ず“没有NP”という表現の生成条件を明らかにし、次に定量名詞の中の人間と関係のある語を検討素材として取り上げ、これを、A類「ある具体的な人の特殊な状況について描写するもの」とB類「いかなる状況の下でも実体、即ち人間と分離できない性質を持つもの」に分け、NPが“没有”により否定されない理由について検討する。そして“没有NP”と定量名詞全般の関係を考察し、最後に、NPが“没有”により否定されない真の理由について、検討結果をまとめることとする。

## 2. “没有NP”という表現の生成条件

### 2.1. “没有NP”という構造の意味

言語は客観と主観により産出された結果である(張国憲 2006:13)。すなわち言語は、人間が客観世界に対して持つ認識であり、品詞の一類別である名詞は、客観世界に対する人間の認知の結果である。そのため、人々により認知される客観世界においては、他と区分のための名称はあるものの、

“没有”のケースは存在しないはずである。言い換えれば、「私が読みたい（本）」とか「ここに置いた（本）」といった一定の文脈がなければ、“没書”（本がない）のような否定表現は成立しないし、他者には理解できないのである。例えば想像上の“鬼”という名詞も、“没有”を用いて「鬼がない」と否定する際には、「鬼がいるはずだが…」というような一定の認知のための前提条件が必要となる。すなわち、“没有NP”という否定表現は、名詞が指し示す種類の否定ではなく、ある文脈の中で意味を付加された名詞の意味しか否定できない。すなわち、“没有NP”はすべて、特定の人に対して「誰にはNPがない」あるいは特定の空間に対して「どこにNPがない」という文中で意味を持つことになったNPの、その意味の否定である。

## 2.2. “没有NP”という否定表現の思考過程

話し手による「新しい情報」の伝達は、いつも一定の前提を基にして行なわれる。この前提は、通常人々が持っている知識データベースの常識である。そのため、知識データベースの中の常識は、特定の前提がない限り、新しい情報として話しの対象になることはない(祝東平 2007)。ここでは先ず、“没有”という否定表現の思考過程を考察することにする。例えば“那个人没有车”(あの人は車がない)を話す場合、話し手はある特定の状況の中で、「あの人は車を持っているはずだ」、あるいは「(聞き手が)あの人は車を持っていると思っている」という、これまでの認識を前提にして、その前提から出発して新たな「客観的な事実」の認識によってこの前提を否定するという思考過程があったはずである。

“没有NP”という表現の生成過程は、このように2段階に分けられる。第1段階では「あるはずだ」あるいは「あると思っている」という認識が前提となり、第2段階で、客観的な事実から得た新たな認識により、前提とされた第1段階の認識を否定する、というプロセスである。

逆に、“没有NP”という表現が生成されないケースは、第一に、前提となる第1段階の認識がそもそも存在しない場合と、第二に、前提となる第1段階の認識は存在しても、それを否定する客観的な事実に基づく新たな認識が形成されない場合の二つである。

### 2.3. “没有NP”という表現の生成条件

“没有NP”という表現の生成条件について、人間と関連する名詞を素材にして検討しよう。人間の身体は多数の部位・器官により構成されていて、これらの部位・器官がすべて「ある」場合を「正常」とし、「ない」場合が「新しい情報」と見なされる。

しかし、「ある」の場合でも、正常な身体には欠かせない部位・器官が存在する場合の「ある」もあるが、例えば悪性腫瘍のように人間の身体に「非・正常」な物が存在する場合の「ある」もある。後者の「非・正常」な物が「ある」場合は、「新しい情報」と見なされる。従って、個人にとって、具体的な体の部位・器官についての情報は、次の2種類に分けられる。

第一に、「ある」ことが「正常」である場合。この前提があれば、肯定表現「ある」は改めて情報とはならず、否定表現「ない」が「新しい情報」となる。逆に、「ある」ことが「非・正常」という前提があれば、肯定表現「ある」が「新しい情報」となって、否定表現「ない」は改めて情報とはならない。たとえば、“头发（髪の毛）、眼睛（目）、鼻子（鼻）”などは「ある」が「正常」であり、否定表現「ない」は「新しい情報」として捉えられる。逆に、“头发、眼睛、鼻子”、などが「ある」ことを「新しい情報」として伝達しようと思う場合は、「ある」ことが「非・正常」という前提が必須となる。

第二に、「ない」ことが「正常」である場合。この前提があれば、肯定表現「ある」が「新しい情報」となって、否定表現「ない」は改めて情報とはならない。逆に、「ない」ことが「非・正常」という前提があれば、否定表現「ない」が「新しい情報」となって、肯定表現「ある」は改めて情報とはならない。たとえば、“伤疤（傷跡）、瘤子（こぶ）、胎记（先天母斑）”などは「ない」が「正常」であり、肯定表現「ある」を「新しい情報」として捉える。逆に、“伤疤、瘤子、胎记”などが「ない」ことを「新しい情報」として伝達しようと思う場合には、「ない」ことが「非・正常」という前提が必須となる。

## 3. 前提の有無

すでに分析したように、“没有NP”という表現の成立条件として、まず、“有NP”という前提が存在しなくてはならないことが挙げられる。

石毓智が抽出した定量名詞(“没有”による否定ができない)の中では、人間と関係のある言葉が大半を占めている。それは、次のように2種類に分けることができる。

|     |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |
|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| A類: | 怪样 | 神采 | 喜气 | 怒容 | 怒火 | 怒气 | 凶相 | 风采 | 贤德 | 贞操 |
|     | 胆略 | 海量 | 才智 | 情思 | 匠心 | 意气 | 卓见 | 高见 | 牛劲 |    |

|     |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |
|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| B類: | 心性 | 体态 | 面貌 | 长相 | 步伐 | 仪态 | 神情 | 神态 | 目光 | 声色 |
|     | 性情 | 禀性 | 体格 | 操行 | 作风 | 资质 | 内心 | 心理 | 心头 | 心弦 |
|     | 心灵 | 元气 | 姓氏 |    |    |    |    |    |    |    |

それぞれの意味的特徴をまとめると、A類はある具体的な人の特殊な状況を描写する語である。B類はいかなる状況の下でも実体、即ち人間と分離できない性質を持つ語である。まずA類語から分析しよう。

上記のA類のようなNP、例えば、“怒容(怒った表情)、凶相(悪い人相)、胆略(胆略)”などの表現は、ある特定の人の特異な状況についての描写であるため、基本的には文脈中に“有NP”という前提がないはずである。従ってこれらの語の否定表現の登場場面も殆どないはずである。北京大学漢語語言学研究中心のコーパスを検索すると、上記A類のNPが“没有NP”という構造を取れるケースが極めて少なかったものの、なかったわけではない。しかも、集めた例文は決して不自然には感じられない。以下で、その一部を見ていこう。なお、例の中には“没有+定语+NP”という構造が含まれている。

〈2〉 我偷眼看看父亲，他在皱眉头，然而没有怒容，他待子女最客气，决不会骂的，更不必说罚了。(私がちらっと父を見ると、父は眉を顰めているが、怒った表情はなかった。父は子供にとっても遠慮して、決して罵ることがなく、更に罰することはなかった)

〈3〉 不用说，那老太婆便是阿妹的恶婆婆了，不过，看上去倒也没有什么凶相，是一个

俏刮麻利的小老太婆。(きっと、あのおばあさんは阿妹さんの意地悪姑だ。だが、見た目にはそれほど悪い人相でもなく、生き生きしていて、てきぱきできそうなおばさんだ)

<4> 人世最平常的大概是友情，最有意思我想也是友情，友情也最难言罢，这里是一篇散文，技巧俱已疏忽，人生至此，没有少年的意气，没有情人的欢乐，剩下的倒是几句真情实话，说又如何说得真切。(友情はこの世で最も一般的にあり、最もおもしろいものだと思う。(しかし)友情とは何かを言い尽くすことは最も難しい。これは一つの散文であり、技巧を凝らしていない。人生がここまで来ると、少年の激情もなく、恋人(といるような)楽しさもなく、残るのは本心の披瀝ばかりだが、そう言っても友情とは何かをなかなかはっきり言い表せない)

<5> 在剃刮胡须时，我们的那双眼睛可一点也没有高兴的神采：每个施行髭须割除术的人都知道，哪怕是天下大乱，那 1.55 万根硬毛第二早上又会在脸上出现。(鬚を剃る時、私達の目には少しも喜びの輝きがない。鬚を剃る人の誰もが、たとえ天下が大乱になろうとも、あの 1.55 万本の硬い毛が翌朝には必ず再び生えてくることを知っているからである)

例文<2>では、先ず文の前半で述べている“皱眉头(眉を顰めている)”により不満であることから“可能有怒容”を連想させる。すなわち、文の前半に“有怒容(怒った表情がある)”という前提が存在している。そして文の後半では、自然に客観的な事実の“没有怒容(怒った表情がない)”を以て先の前提を否定している。例文<3>の“恶婆婆(意地悪い姑)”も同様に、先ず文の前半で“恶婆婆(意地悪い姑)”を述べて、これによって連想される“有凶相(悪い人相がある)”という前提が存在している。そして文の後半で、見た客観的な事実を以て先の前提を否定している。例文<4>と例文<5>についても同様なことが言える。これらの例文の文脈では、すべて“有NP”という前提が連想できる形で存在しているため、“没有NP”という表現が成立する。

#### 4. 前提を否定するための客観的な事実が存在するか否か

アリストテレス(1959)によれば、“个体的人は第一实体、有很多方面的性质、有些性质无论在任何情况下都不能与实体分开。”先に分類したB類の語は、いかなる状況の下でも実体、即ち人間と分離できない性質を持っている。互いに分離できないということは、人間であれば必然としてこれらの性質を持つことを意味し、これらの性質が人間から離れて抽象的に存在することもできない。しかも、人間にとって、これらの性質は人間の側面であり、1つ以上持つ可能性は存在しない。従って、これらの名詞は、否定され得ないし、肯定される必要もない。また当然、数量語句の修飾を受けることもない。これこそ、この種類の名詞語句が“没”により直接否定され得ない本来の理由であると言える。この見解について以下の二つの点から更に論証してみよう。

先ず、具体的な体の部位・器官を表す名詞は一般的には助数詞により数を量ることができる。これらの名詞は有界的且つ離散的である。しかもこれらの名詞の大半は“没有NP”という構造に入ることができる。一方、具体的な部位・器官は人間の性質と同じように不可欠な場合もある。例えば“心”や“肝”は具体的な物を指す時、有界的である。従って“一颗心”や“一块肝”等のような言い方が存在する。一方これに対して、比喻として使う場合、非有界化される。例えば：“那个人没有心肝（あの人には心臓と肝臓がない）”と言う場合、“心肝”を具体的な物を示していると理解することはない。それは、神話や童話などのような非現実的な作品以外には、人に“心肝（心臓、肝臓）”がないことはあり得ないためである。例文<6>は、北京大学漢語語言学研究中心のコーパスを検索した具体例である。

<6> 马学武却没有半点感动，倒是冷冷地想，这个女人怎么这样没心没肝。昨天那么凶恶，今天又来卖乖。（馬学武さんは感動するどころか逆に、この女は昨日はあれほど凶悪だったのに、今日はさりげない顔をして、どうしてこんなに良心がないの

かと思った)

当然この場合の“没心没肝”は具体的な部位・器官を示す有界な“心”と“肝”がないという意味ではなく、比喩として、人間のある種の性質(例えば良心等)を表していると考えられる。更に“大脳”という語の具体例も見てみよう。“大脳”は、『現代漢語辞書』によれば、“中枢神経系统中最重要的部分，正中有一道纵沟，分左右两个半球，表面有很多皱襞。”と記載されている。“大脳”は人間の身体の具体的な部位・器官を指す。北京大学漢語語言学研究センターのコーパスを検索した結果、“没(有)大脳”が全部で13例あった。

〈7〉 张延东介绍，由于这套设备陈旧老化，而且本身无软件，就象一个人没有大脳和心脏，因此投入使用后运转情况始终不是太好。(張延東さんは、「この設備は古くて老化している。その上ソフトウェアも入っておらず、まるで人間に大脳と心臓がないかのようだ。そのため稼働し始めてからずっと、状況があまり良くなかった」と紹介した)

〈8〉 我今天没有大脳，什么都想不清。(私は今日大脳がなく、何もはっきり考えられない)

〈9〉 如果为人父就代表着必须感情用事，变成没大脳の笨蛋，那我一定会小心不让自己陷入这个境界。(もし人の父親になると、必ず感情的になって、大脳のない馬鹿になりがちだとすれば、私は自分がそういう状況に決して陥らないように注意する)

この内、例文〈7〉だけが具体的なレベルの意味(辞書に記載される意味)として使われていると考えられるが、この場合は修辭的な、比喩としての使い方である。例文〈8〉と例文〈9〉を含めて残りの12例は、すべて抽象的なレベルの意味、即ち“大脳”が辞書に記載される意味ではなく、“大脳”が示す対象の持つ諸々の性質・特徴の意味として使われている。ここでは人間として持っている性質の一つ、思考能力などを示すと考えられる。この場合の“大脳”は非有界的である。

更に、人間は複数の性質により描かれることが可能である。たとえば、身長、体重、体型、容貌な



ど、それぞれについて主観的にプラス評価やマイナス評価ができる。中国語において、一般的には対になっていて、意味が正反対の形容詞によってプラス評価やマイナス評価を表す。度量を言うには“大”と“小”、頭脳を言うには“聪明”と“笨”、性格を言うには“善良”と“凶残”、レベルを言うには“高”と“低”がそれぞれある。このプラス評価とマイナス評価の間には連続性がある。そのため、“很有水平”、“很有头脑”等のような表現が存在する。既に分析したように、人間のある種の性質を表すこのグループの語句は、人間であれば必然として持っている性質であるため、“没有NP”という表現は成立しない。しかし、石毓智(2001:159)は“‘度量’等这些意义抽象、空灵的词语，如果加上了积极性质的意义，它们的词义就转化为具体的、完整的，也就是说成为了界限分明的个体，这样就使得它们具有了离散量的性质，因此也就可以用‘没’否定。‘度量’等在否定式中发生的语义偏移证实了这一点。”と述べている。

確かに“要个子，没个子，要长相，没长相”という文を理解する場合、文中の“个子（身長）、长相（顔立ち）”という語は辞書に記載された本来の意味との間にズレが生じて、言語使用上の意味はプラスの方向を示し、しかもこのプラスの方向は話し手が予期する方向である。一方、この場合の“度量（度量）”、“个子（身長）”、“长相（顔立ち）”などの意味は、辞書に記載された本来の意味との間にズレが生じて、依然として数量語句の修飾を受けることができず、依然として非有界的である。人は誰も“度量”、“个子”、“长相”などを持っているが、その性質については一つしか持っていない。しかし“大的度量（大きい度量）”、“高的个子（高い身長）”、“漂亮的长相（美しい顔立ち）”という性質はすべての人が持っているとは言えず、持っていない人が客観的な事実として存在している。したがって、辞書に記載された本来の意味と言語使用上の意味の間にズレが生じてプラスの意味を持つようになったため、特定の前提が存在する場合には否定されることがあり得ると言えよう。

実は、前述のB類の語は、すべて「意味のズレ」が生じたら“没有NP”という表現が成立するわけではないが、多くの語は性質を表す連体修飾語を付け加えられた後、特定の前提がある場合には、

“没有+定语+N P”という構造を取り、成立する。以下で、その具体例を挙げてみよう。

- <10> 在我遭到不公正待遇的日子里，除了得到了社会各界的理解和关心以外，还受到国内外各方的邀请、聘任，而我却没有做官的禀性，不愿当官，这是我一贯抱定的宗旨。（私が不遇だった頃には、社会の各界から理解と関心を持たれたほか、国内外からの招待、任命を受けた。しかし、私には官僚の資質がなく、役人にはなりたくない。これは私が一貫して抱いている考えである）
- <11> 这里没有如针尖的目光，没有会诱发荨麻疹的窃窃私语。（ここには針の先のようなまなざしがないし、じんましんが出るようなヒソヒソとした私語もない）
- <12> 可是她却没有夸耀的神情，圆润的脸上透着一团恬淡，只有身上的一件红色风衣，烘托出少女般的纯真和热情，尽管她已是有33年艺龄的“老”演员了。（しかし彼女には、誇示する表情はなく、丸くて潤いのある顔がすがすがしい。ただ身にしている赤いウインドブレーカーが、彼女の少女のような純真さと情熱を引き立たせている。彼女はすでに33年間のキャリアを持つ“ベテラン”役者である）
- <13> 所以康克清妈妈将父亲遗留下来的钱全部交了党费，我们一点也没有不平衡的心理，倒觉得这样很好，因为这是父亲生前的愿望，也是他唯一的愿望。（康克清さんが父の残したお金をすべて党費として納めたことについて、私達には不公平と思う心理は少しもなく、却ってこのようにしてくれてとても良かったと感じた。これは父の生前の願望であり、しかも唯一の願望であったからだ）
- <14> 他认为女人的最根本的特点就是“自相矛盾”，没有固定性格，温柔倩女顷刻间就会变成凶狂悍妇。（彼は、女の最も根本的な特徴は“自己矛盾”を持ち、一貫した性格がなく、そのためやさしい美女があつという間に凶悪で狂気のお婆さんになれることだと思っている）
- <15> 儿童虽没有荡秋千的胆量，却也有自己的趣事，他们不失时机地拿出染成五颜六色

的熟鸡蛋来相互碰撞。(児童には、ブランコで遊ぶ度胸はないが、自分の遊びをちゃんと持っている。彼らは遊ぶチャンスを逃がさないように色とりどりに染めたゆで卵を出して衝突ゲームを楽しんでいた)

- <16> 当然得到令牌还有另一条途径，那就是趁二爷熟睡后举刀砍下他的头，这是二爷自己教她的，但她清楚，自己决没有杀人的胆量，二爷一定看透了她才这么教给她。(令状を入手する方法は当然、別にもある。旦那さまの熟睡後、刀を振り上げて彼の頭を切り落としてしまう方法だ。これは旦那さまが自分で彼女に教えた方法だ。しかし彼女は、自分には決して人を殺すほどの度胸がないことをはっきり知っている。旦那さまもきっと彼女（の度胸のなさ）を見抜いていて、（この方法を）教えたのだ)

上記の例に見られる“連体修飾語+N P”という形式は、依然として数量語句により数を量ることができず、相変わらず非有界的である。しかし、連体修飾語を付け加えることにより“稟性、目光、性情”などに対して制限が加えられて、これらは元々人間であれば誰も持っている一側面の性質が、すべての人ではなく、一部のしか持っていない性質となる。例えば例文<11>の“目光”や例文<16>の“胆量”はすべての人が持っているが、しかし“如針尖的目光(針の先のようなまなざし)”や“杀人的胆量(人を殺すほどの度胸)”は一部の人(少数者)しか持っていないと考えられる。すなわち、すべての人が持っている性質ではないと否定できる、客観的な事実が存在している。したがって、もし一定の文脈の中で、「(ある性質)を持っているはずだ」あるいは「(ある性質)を持つ必要がある」という前提が存在していて、新たな客観的な事実を以ってこの前提を否定することができるのであれば、“没有(+定语)+N P”という表現が成立するのである。

## 5. “没有N P”表現と定量名詞全般の関係

以上、“没有N P”という構造を取れないN Pについて、人間と関係がある定量名詞の例を分

析してきたが、実は、その他の“没有NP”という構造を取れないNPもすべて、すでに分析したような二つの理由のためである。即ち：

一つ目は、ある種類の事物にとっては否定できる状況が存在しない場合である。例として以下の語を挙げることができる。

|    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 景况 | 形势 | 状态 | 式样 | 气象 | 生计 | 饮食 | 性质 | 音质 | 局面 |
| 方面 | 领域 | 天地 | 世界 | 官场 | 文坛 | 艺林 | 谱系 | 山系 | 表面 |
| 外部 | 门面 | 尺码 | 品质 | 质地 | 分野 | 鼎立 | 称谓 | 名目 | 固态 |
| 天伦 | 意旨 | 要害 | 实质 |    |    |    |    |    |    |

二つ目は、文脈において前提とする“有NP”が存在しない場合である。例として以下の語を挙げるができる。

|    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 世交 | 机缘 | 风光 | 景物 | 春光 | 奇观 | 通病 | 症结 | 微利 | 流弊 |
| 积弊 | 特性 | 异样 | 楷模 | 典范 | 牢笼 | 基本 | 本位 | 主脑 | 师表 |

その他に、真実とする“世界”は否定されない。それはわれわれ人間がすべて“世界”の中で生きているからである。しかし、仮説の中であれば否定されることが可能である。例えば次の例がある。

<17> 一切事物中包含的矛盾方面的相互依赖和相互斗争，决定一切事物的生命，推动一切事物的发展，没有什么事物是不包含矛盾的，没有矛盾就没有世界。(すべての事物の中に含まれている矛盾した側面の相互依存と相互闘争とは、すべての事物の生命を決定し、すべての事物の発展を推進する。どのような事物も矛盾を含まないものはなく、矛盾がなければ世界はない)

仮説以外に、もし“世界”はわれわれが生きている空間ではなくなり、限定された“世界”になれば、否定されることが可能となる。これは前述したように、語の意味にズレが生じた場合と同様である。意味のズレが生じた場合には存在の必然性を失い、従って否定できる客観的な事実が存在することとなる。否定できる客観的な事実が存在すれば、言語中の表現として否定することは当然できることとなる。例えば次の例がある。

〈18〉 不能远离一些俗情，用花木禽鱼中的趣味来陶适性情、纾解劳累的人，往往没有内心生活世界。现在我再回到哲学问题上，玻尔有一段我非常喜欢的话：并没有什么量子世界，只有一个抽象的量子物理学的描述。（世俗的な心情から遠く離れることができないで、花・木・鳥・魚に対する趣味により心を豊かにし、疲れを癒そうとする人には、大抵、心の世界がない。では、また哲学の話に戻って、私が大好きなボーアの「そもそも量子の世界はなく、ただあるのは量子物理学による抽象的な描写である」という話がある）

“中国”は中国人が生存する空間として、否定できない真実である。従って“没有中国”という表現は、仮定の意味を表す文か、あるいは空想を表す文の中でしか成立しない。しかし、“没有两个中国”という表現はある。それは、“两个中国”を否定できる客観的な事実が存在するためである。

## 6. まとめ

すべてのNPが“没(有)”によって否定されるわけではない。“没(有)”によって否定されるNPと否定されないNPとの分岐点は、どこにあり、それは何によって分かれるのか。このことに関して、本稿では、“没有NP”という表現の生成過程と成立条件の考察を通して、NPが“没有”により否定されない場合の理由について検討してきた。

その検討結果をまとめると次のようになる。

NPが直接“没有”により否定されない根本的な理由は、NPが「数量語句を用いて自由に数えられるか否か」ではない。“没有NP”という否定表現は、名詞が示す事物それ自体の否定ではなく、特定の人あるいは特定の空間(場所)との関係で意味を持つことになった名詞の意味の否定だからである。“没有NP”という表現の生成過程では、先ず“有NP”という認識(連想や推測等を含む。)が前提として存在し、そこに、客観的な事実から得られた新たな認識が持ち込まれ

て、前提としていた認識が否定されるという2段階の過程を経る。したがって、“没有NP”という表現の成立には、この2段階の過程を必要とする。

逆に、この2段階の過程を経ることができなければ、“没有NP”という表現は生成されず、したがって、NPが“没有”により否定されることはない。即ち、NPが“没有”により否定されないケースは、第一に、人々の認知世界の中で前提となる第1段階の“有NP”という認識がそもそも存在しない場合か、あるいは第二に、前提となる第1段階の認識は存在しても、それを否定する客観的な事実に基づく新たな認識が形成されない場合の二つである。

本稿では、中国語における否定表現の生成及び成立条件の研究の一環として、名詞の否定について考察した。今後、形容詞、動詞の否定表現についての考察に進む計画である。

#### 《参考文献》

- 初山洋介 2002. 『認知意味論のしくみ』。東京：研究社。
- 吕叔湘 1984. 『现代汉语八百词』。北京：商务印书馆。
- 沈家煊 2006. 『认知与汉语语法研究』。北京：商务印书馆。
- 石毓智 2001. 『肯定和否定的对称与不对称』。北京：北京语言文化大学出版社。
- 亚里士多德（方书春译） 1959. 『范畴论』。北京：商务印书馆。
- 张国宪 2006. 『现代汉语形容词功能与认知研究』。北京：商务印书馆。
- 朱德熙 1982. 『语法讲义』。北京：商务印书馆。
- 祝东平 2007. 「从“不是/没有NP”看“不”、“没（有）”的语义区别」，第四届对外汉语国际研讨会论文。

#### 《例文出典》

北京大学汉语语言学研究中心 C C L 现代汉语语料库

[http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl\\_corpus/index.jsp?dir=xiandai](http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/index.jsp?dir=xiandai)